ブータンに学ぶ国民の幸せとは

What is the People's Happiness that We Can Learn from Bhutan?

上田 晶子
Akiko Ueda

大阪大学
グローバルコラボレーションセンター
特任准教授
Specially Appointed Associate Professor
Global Collaboration Center
Osaka University

所得と人々の幸福度の関係については、今までにそれほど多くの研究がされているわけではなく、その相関関係については、これからさらに議論が深まることが期待されている。所得と幸福度には、相関関係があるとする研究がある一方で、アメリカや日本などの先進国では、収入が増加した時期にも人々の幸福度はそれほど変化していないというデータも発表されている。

ブータンは、GNHの理念のもと、国民の幸福の増大を目標とした政策がとられており、経済の発展は国民の幸福を達成するための手段のひとつと位置づけられている。ブータンは、個人が個人として認められ、尊重される社会であり、それぞれの人が自分のもつ、いくつもある役割をバランス感覚をもって果たしている。経済活動に関する役割は、いくつもある役割の一つである。

ブータンでは、「心の余裕」や、人や自然環境との関係や、個人の役割の尊重ということが、幸福にかかわる重要な要素のように見受けられる。これらは、収入の増加と幸福度の間には、強い相関関係がないことを暗示しているようにも思われるが、ブータンにおける幸福と収入の関係については、GNHの数値化に向けた枠組み作りの完了をうけて行われるであろう調査を待たねばならない。

経済成長それ自体を目標にしてきた日本人は、経済成長の位置づけを、国家の政策の中で、そして、個人の生活のなかでもう一度考えてみる必要があるだろう。

The relation between income and people's happiness has not been explored much in academic fields, and more research on this topic is expected to be carried out. Some research shows a positive correlation between income and happiness, while others indicate that people's happiness has not increased even during periods of high economic growth in developed countries such as the U.S. and Japan.

Bhutan takes policies that ultimately aim at increasing the happiness of people, and the development of their economy has been positioned as one of the tools to achieve this. In Bhutanese society, it is recognized that each person has many roles to play and they perform his or her own roles with a sense of balance. A role relating to economic activities is only one of many roles.

The author has observed that "room in the heart", the relationship between humans and the natural environment, and respect for individual roles are some of the important elements of people's happiness. These appear to suggest no strong relationship between rising incomes and the degree of happiness. However, for more certain data, we need to wait for completion of the GNH index (Bhutan Development Index) to see whether there is a relationship between happiness and income in Bhutan.

In Japan there has been a tendency to take economic growth itself as the goal for a society as well as for an individual life. We might now need to reconsider the position of economic growth within the national policies and also within the lives of individuals.

国の経済状況と国民の幸福感との間に何らかの関係があるのか、あるとすればそれはどのような関係かといった問題は、非常に興味深いテーマである。しかし、この問題についての研究はそれほど進んでいないのが現状である。

本稿では、「国民総幸福量」の増大を国家の開発目標として掲げ、近年注目を集めるブータンを例に、人々の所得と幸福度について考えてみたい。ヒマラヤの王国ブータンに飛ぶ前に、まず、現在までに発表された、所得と国民の幸福度の関係を国ごとに比較したいくつかの主要な研究を概観してみることとする。

1 所得と幸福に関する研究

幸福（happinessあるいはwell-being）に関する研究は、従来、心理学の領域のものだと思われてきた。それゆえに、経済学の分野で幸福に関連する研究はそれほど行われてこなかった。人々の所得と幸福感に関する初期の研究が発表されたのは1970年代のことであった（Schyns, 1998: p. 3）。イースタリンなどによって1970年代に発表された研究は多くの経済学者の注目を集めたが、その後、それに続く研究はあまり行われてこなかった。幸福や "Well-being" についての研究が経済学と絡める形でもう一度行われるようになったのは、1990年代に入ってからである（Frey and Stutzer, 2002: p. 404）。シンスの論文は（Schyns, 1998）、生活水準と幸福度の研究についての2つの理論を紹介している。ひとつは、比較説、もうひとつは必要説である。比較説によれば、人々は周囲や自分の過去との比較によって幸福や不幸を感じる。例えば、周囲の人々が自分よりも貧しければ、自分は幸福であると感じる（Easterlin, 1974 in Schyns, 1998: p. 6）。また、宝くじに当たるというような幸運な出来事に遭った人が、そのような出来事に遭わなかった人よりも、のちに幸福を感じにくくなるのは、大きな幸運を体験してしまったがゆえに、小さな出来事に幸福を感じにくくなってしまったからであると説明する。つまり、過去に自分に起こった幸運な出来事との比較をしているからであるという（Brickman et al. in Schyns, 1998: p. 6）。イースタリンは、一国のなかにおいては、収入と幸福度について強い相関関係が認められるが（お金持ちほど幸福を感じている）、国際的な比較となると、その関係はほとんど認められなくなるというデータを発表し、それを比較説に立って次のように説明した。つまり、近所全部が小さい家の場合は、自分の家が小さくてもそれほど不幸とは感じないが、同じサイズの家が、近所の家が皆それよりも大きな地域に建っていたら、住んでいる人は自分を不幸と感じるであろうというのである。さらに、イースタリンは、どの国においても、標準的な消費水準というものがあり、人々はそれと比べて、自分の生活水準を認識しており、国と国の幸福度を比べるとそこに大差はなくなるのだと説明する。

これに対して必要説は、必要が満たされることが幸福度を増すのにつながるのだと説明する。マズローは、人が必要とするものをその必要度によって段階的に区分をした。彼によると、最も必要なものは、食糧や水といった生存に必要なものである。そして、彼のリストは、安全、自由、人々との親交、社会的に高い地位というようにあがっていく（Maslow in Schyns, 1998: p. 8）。マズローはリストの高位にあるニーズを満たすには、よりよい環境が必要であり、その環境には、文化的な要因とともに、生存を維持するよりももっと高いレベルの物的、経済的要素も重要な役割を果たすのだという。

これらの研究は個人のレベルの幸福度に関するものであり、国レベルの議論にはこれらの説は推測を提供するにすぎない。比較説にたてば、国と国との比較では、小さな差しかないであろうということになるし、必要説にたてば、経済的環境は高位のニーズを満たすのに貢献しているのであるから、経済的に高水準の国では幸福度も高いであろうということになる（Schyns, 1998）。それでは、ほかに発表されているデータからは、所得と幸福の間にどのような関係が観察されているのであろうか。

しばしばこの問題に関連する文献で引用されるのが、

先進国で経済成長が順調であった期間にも、人々の幸福度はそれほど上がっていないというデータである。ケニー（Kenny, 1999）によると、日本では1958年から1988年の間に、人々の幸福感には大きな変化がないのに、同期間に1人当たりの収入は2,436米ドルから13,156米ドルへと増加している（米ドル同価値において）。また、フレイとシュトゥッツアー（Frey and Stutzer, 2002）の研究によると、アメリカ合衆国においては1946年から1996年の間に1人当たりの平均実質所得は約11,000米ドルから27,000米ドルに増加したのに対し（1996年の価値の米ドルでの計算）、同じ期間に人々の幸福感には大きな変化は見られないそうである。また、同様の現象は日本、ベルギー、英国でも見られると報告している。どの国も、1人当たりの実質所得が大きく増加したのに対し、人々の幸福感は横ばいである。このようなデータは、一見、幸福度と収入の間には相関関係はないことを示唆しているようにとれるし、実際これらのデータはそのように解釈されている。だが、別の見方をすれば、その程度の収入の増加は幸福度を維持するに十分ではあったが、幸福度を大きく増すほどのレベルではなかったという解釈もありうる。しかし、上記の研究は、このような見方の妥当性については言及していない。

一方で、Veenhoven（1991）は1970年から1985年の間に収集した22カ国のデータから、経済的に豊かな国に住む人々がより幸福を感じているという単純な傾向は強くは見られないにしても、収入のレベルと幸福感の間にある程度の関係は認められると分析している。そして、収入と幸福感との相関関係は収入の高い国ほど弱くなるとしている。類似の結論はケニー（Kenny, 1999）の研究にもみられる。ケニーは、1990年のデータで1人当たりの所得が8,000米ドルを超えるようになると、1人当たりの所得と幸福感の変化には相関関係がほとんどなくなると分析している。また、レイヤード（Layard, 2003）の用いているデータにおいても、1人当たりの所得が一定以上（この場合は15,000米ドル）の国々では、所得が高い国ほど幸福度が高いということはいえなくなるという結果がみてとれる。つまり、ある一定レベルまでは、所得が高い国ほど幸福感が高いが、それ以上のレベルになると、経済的、物質的状況は人々の幸福感とあまり関係がなくなるというのである。

これに対して、イースタリンは最近の論文で（Easterlin, 2001）、収入と幸福感の相関関係が軽視されていると反論している。彼は、今までに行われた国レベルのどの調査においても、収入のレベルと幸福感の間には相関関係がみられていると主張する。そして、収入と幸福感の間に相関関係がそれほどみられないという結論に至っている研究に対して、収入の増加は絶対的な数値ではなく、その割合をみるべきなのではないかと提案している（p. 468）。つまり、人々の幸福感は収入の伸び率に比例しているのかもしれないと彼は暗に示しているのである。しかし、イースタリンもこのような仮説を証明するまでは踏み込んでいない。また、日本が高度経済成長を経験していた時期にも、人々の幸福感にはそれほどの変化はなかったという先に示したデータを、この仮説が説明できるかどうかは疑問である。

いずれにしても、人々の所得のレベルと幸福感との関係については、まだまだ論争が続きそうである。本稿では、ひとまず先行研究の概観を離れて、国民総幸福量の増大を国家の開発目標とするブータンの事例を少し詳しく考察することとしたい。ブータンの試みは、今までに揚げた研究に関連するところも多くあり、本稿の結論部分では、それらについても議論してみたい。

2 ヒマラヤの王国ブータン

上記の収入と幸福の相関関係の流れで、ブータンを紹介すると、次のようになるだろう。ブータンは、2005年の1人当たりの国民所得は834米ドル、GDP成長率6.5%の国である（National Statistics Bureau, 2006）。この国で、2005年に行われた国勢調査に、「あなたは幸せですか？」という質問があった。この質問に、「とても幸せ」と答えた人は45.1%、「幸せ」と答えた人は51.6%、

「あまり幸せではない」と答えたのは全体の3.3%であった。国民のほとんど全員が、程度の差はあれ、幸福であると答えているのである。フレイとシュトゥッツアー（Frey and Stutzer, 2002）の研究によれば、1958年から1991年の間に日本人の1人当たりの実質国民所得は5倍以上になっているのに対し、同じ期間のあいだ、人々の幸福度は1（幸福ではない）から4（幸福）の尺度で平均2.7をコンスタントに保ち続けている。調査の仕方がまったく異なるので、単純な比較はできないが、試しにブータンの国勢調査の結果を同様に1から4の尺度で換算してみると、平均は3.1となる。ブータンの事例は、収入と幸福度との間には相関関係がないとする説を強力にサポートするケースなのだろうか。それとも、今よりも1人当たりの収入が増えれば、より多くの人が、「とても幸せ」と答えるようになるのであろうか。

もう少し同国について紹介しよう。ブータンは、ヒマラヤ山脈の東側に位置する内陸国である。面積は、九州よりも少し広い程度で[1]、そこに約63万5,000人の人々が暮らしている。このうち、24歳以下の人口が全体の56%を占める。(Office of the Census Commissioner, 2006: p. 17)。国境を接しているのはインドと中国という大国で、その地理的な位置がこの国の指導者たちに外交関係での微妙なかじ取りを要求してきた。歴史上必ずしも友好的とは言い難い二大国のはざまにあって、ブータンは先見の明のある歴代国王のもと平和を享受している。国土の約73%を森林が占め（National Statistics Bureau, 2006)、政府は環境政策に特に力をいれている。来年、発布される予定の憲法の草案には、森林面積を常に60%以上に保つことが謳われている。

平和を享受し、自然環境にも恵まれたブータンで、政府は教育や医療の面でこれからも一層の努力が必要と認識している。6歳以上の人口の識字率は約60%（Office of the Census Commissioner, 2006）であるが、初等教育の就学率が約80%[2]であることを考えると（Ministry of Education, 2006)、この割合は将来急速に改善されることが予測できる。事実、年齢別にみると、29歳以下の集団において識字率は約75%である（Office of the Census Commissioner, 2006より算出)。

学校教育は大部分の場合、英語で行われている。これは、ブータンで今日のような学校教育が1960年代に始まった頃、教師も教科書もインドから輸入され、国語であるゾンカ語で書かれた教科書がなかったことに由来している。当時は、教育といえば、お寺でお坊さんからゾンカ語の読み書きや古典チベット語を習ったり、仏教の経典を学ぶことであったという[3]。最近は、ブータン独自のカリキュラムが整備されつつあるが、教科書の中身をインドで使われているものからブータンに合った内容に変えるというのが主な動きで、教科書や授業で使用される言語は英語が主流である。国語であるゾンカ語は国語の時間にのみ使用されることが多いようである[4]。参考までに付け加えると、日本でいう国文学科にあたるゾンカ語専攻の大学の学位コースが最近整備され始めている。教育にかかる費用は、大部分を占める公立の学校では初等教育から高等教育まで、制服など多少の自己負担はあるが、学費は無料である。

ブータン人の平均寿命は66歳である（UN Bhutan, 2006)。1歳以下の乳児死亡率は出生1,000人当たり40人（Office of the Census Commissioner, 2006)。つまり、25人の赤ちゃんのうち1人が1歳になる前に死亡している。ブータンでは29の病院と180近くのBasic Health Unitという簡易保健所を中心として医療が行われている（Office of the Census Commissioner, 2006)。現在国内で働いている医師は約150人。病院と簡易保健所はすべて国が運営しており、医療費は無料である。

経済状況も少し紹介しておこう。2005年のGDPに占める割合では農業（畜産業と林業を含む）が22.4%、ついで建設業の17.2%となっている[5]。農業は全就業人口のうちの4割以上が従事している（Office of the Census Commissioner, 2006: p. 393)。また、ヒマラヤの山々から流れる豊富な水を使って、水力発電が行

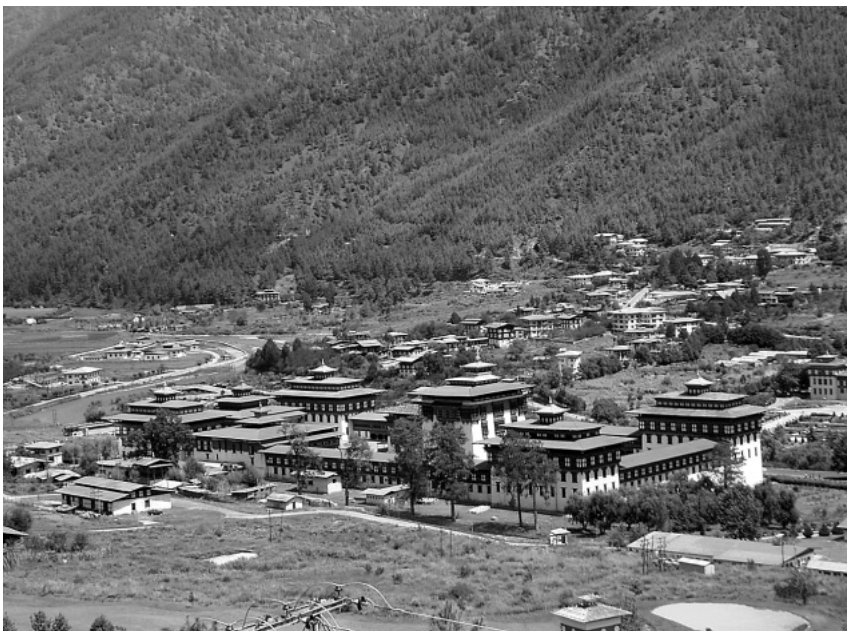
われており、大部分はインドへ輸出されている。対外的には、中国との国境が閉鎖されていることもあり、インドとの貿易が盛んである。2005年の統計によるとインドからの輸入は全輸入額の約75%、輸出は約90%を占める（National Statistics Bureau 2006）。通貨のヌルタムもインドルピーと等価で連動している。

ブータンがヒマラヤ山脈の東部に位置することはすでに紹介したが、これは国土が大変に山がちであることを意味している。インドと国境を接する南部の地域は標高150メートルほどであるのに対し、そこから北へ移動するに従ってどんどん標高は高くなり、中国のチベットとの国境辺りでは標高7,000メートルを超える山々が連なる。首都であるティンプは標高2,400メートルほどのところにあり、夏は冷房の必要もそれほど感じず、冬には雪が2，3回降る程度というとても過ごしやすい気候である。山がちな国土は、道路建設が難しく、また、その費用が高くなることを意味している。1960年にブータンが開発政策を始めて以来、政府は外国からの援助も得て、国内の道路網の整備に取り組んでいるが、現在でも一番近い自動車道路まで歩いて1時間以上かかる家庭が全体の約3割に上り、このうちの3割の家庭（全体の1割）は6時間以上歩いてやっと自動車道に出ることができる（Office of the Census Commissioner, 2006）。また、家々が山の斜面のそこここに点在しているのもブータンの風景の特徴である。風景としてはとても美しいのであるが、実はこれは一つひとつの家庭に電気、水道、電話といった基本的なインフラを整備するのに非常にコストがかかることを意味している。また、学校や医療設備へのアクセスを難しくしているのも、地形による要因がとても大きい（Ministry of Planning,1996: p. 10）。

人口約60万の、九州よりも少し大きい山がちな地形の内陸国。国境を接するのは人口10億以上を抱えるアジアの二つの大国のみ。しかも、その一方との国境は閉じられている。主な産業は農業と水力発電による電力の輸出。一方で、過去に植民地となった経験はなく、独立を保ちつづけている。そのような国で、どんな発展が望まれているのであろうか。次のセクションでは、ブータン政府が目指している発展の方向を検討してみたい。

3 ブータンの開発政策と国民総幸福量：価値観の大転換－経済成長から幸福へ－

ブータンは「国民総幸福量（Gross National Happiness: GNH）の増大」を開発の目標としている。



ブータンの中央政庁　タシチョゾン

これは、第4代国王ジクメ・センゲ・ワンチュック（1955－、在位1972－2006[6]）が1970年代に「重要なのは国民総生産（GNP）ではなく、国民総幸福量の増大である。」と発言したことから始まるブータンの開発政策を貫く重要な理念である。ここで、当時の国王は世界に向かって全く違う価値観を提示したのである。世界中が高い経済成長へと突っ走っている中で、その趨勢に対抗しようとした意図はこの表現方法に読み取れる。国民の幸福を一番の目標とするという考え方はGNHという言葉でなくとも表すことができたはずだ。しかし、そこで、GNPにかけた表現を用いたところに、経済成長至上主義への批判がうかがえる。今枝由郎氏は『ブータン仏教から見た日本仏教』のなかで、第4代国王が同氏に、GNHによって意図したところはブータン人一人ひとりが自分の人生に「充足感」をもつことであると語ったと書いている。このような理解をもってしても、GNHが経済成長一辺倒の傾向に一石を投じ、国家の政策に全く新しい価値観を示していることに変わりはない。第4代国王はその地位を息子のジクメ・ケサル・ナムギェル・ワンチュックに譲ったが、GNHを目指した政策は、これからも継承されていく。2008年に発布される予定の憲法には、政府は、GNHの向上を追求するのに適切な環境の整備を行うべきことが明記されている（第9条第2項）。

GNHは、経済成長や、社会的、経済的発展を否定するものではない。ブータン政府は、GNHの柱として4つの要素をあげている。それらは、（1）持続可能で公平な社会的、経済的開発、（2）自然環境の保護、（3）伝統文化の保護と発展、（4）よりよい統治の促進、である（Thinley, 2005）。社会経済的発展は人々の幸福を増大するために必要な基礎をもたらすものと解釈されている。そして、社会経済的発展は、他の3つの要素があってこそ人々の幸福に資するものであると考えられている。つまり、経済がいかに発展しようとも、自然環境が荒廃したり、伝統文化が失われてしまったり、政治や行政が汚職と非効率にあふれていたら人々の幸福はありえないという考え方である。そして、経済成長も国内の貧富の差を拡大しない性質のものでなくてはいけない。経済成長の質を問うと同時に、経済発展だけでは、国民は幸福にはならないという考えである。

GNHの理念は1970年代にさかのぼると書いたが、その後、政府の文書を見る限りこの概念を詳細にわたって探求しようという動きはしばらく表れなかった。政府の五カ年計画の冒頭部分にGNHの理念がブータンの開発の究極の目標として紹介される以外には、個々の政策やプログラムのレベルでGNHが議論されることは、表立ってはあまり活発に行われてこなかった。もちろん、保健医療や教育といった社会的分野に非常に大きな比率で予算が配分されてきたのは[7]、背後にGNHの考え方があってのことではあろうが、政府文書のなかでそのような関連が明確に述べられることは1990年代の終わりまであまりなかったのである。

GNHの議論が盛り上がりをみせたのは、1999年の第4代国王戴冠25周年記念式典と、それに先立つ総理大臣兼外務大臣（当時）ロンポ・ジクメ・ティンレ氏による国連開発計画アジア・太平洋地域ミレニアム会議（1998年）での基調演説をきっかけにしてであった（Thinley, 1998）。GNHをテーマにワークショップや国際会議が開催され、論文集が出版された[8]。そして、GNHという考え方は国際的にも注目を集めるようになっていったのである。ティンプで2004年に初めて開かれたGNHに関する国際会議は18カ国から80人以上の参加者を集め、3日間の会議を傍聴した人はのべ400人にのぼった。これに続く2回目、3回目の国際会議が、カナダ（2005年）とタイ（2007年）で開催されている。これは、GNHという理念がブータンの国外においても、多くの同調者を集めていることを象徴している。これらの国際会議は、ブータン研究所のみならず、GNHの考え方に関心をもつ国外の団体との共催となっている[9]。1990年代後半からのGNHに関する議論の中で浮かび上がってきたのは、いかにしてGNHを理念という抽象的なレベルだけにとどめず、日常の細かな政策やプログラムのレベルで実践していくかという問題であった。GNHの実践のひ

とつの試みが、現在進行しているGNHの指標化であり、国立ブータン研究所（Centre for Bhutan Studies）が中心となって進められている。また、第10次五カ年計画（2008－2013）の策定作業にもGNHと個々の計画の関連を明確にする方針が打ち出されている（Planning Commission, 2006）。

ブータンでは人々の幸福はどのように定義されているのだろうか。大枠では、先に示したGNHの4つの柱がブータン政府が考えるところの人々の幸福に必要な要素である。ブータン研究所が現在作業を進めているGNHの数値化（“Bhutan Development Index”の作成）をめざした作業では、GNHの4つの柱とブータン人の幸福に重要と考えられる要素を考慮して、幸福を以下の9つの分野に分けている。①経済的な生活水準、②健康、③教育、④生態系の多様性、⑤コミュニティの活性と回復力、⑥精神の健康、⑦よい統治、⑧文化的な回復力と許容能力、⑨日常のさまざまな活動への時間配分。数値化のための質問票と統計処理の方法が確立した後には、ブータン統計局が定期的に調査を行い、結果は開発の五カ年計画の評価と作成に生かされることになっている。

4 「1周遅れの1位」

ブータンのGNHの増大という開発政策について「1周遅れの1位」という表現が用いられることがある。今までのルールで走っていたら1周遅れだけれども、ルールを変えてみたら1位だったということであろうか。これは、経済成長ではなく、幸福の追求という全く違う価値観を提示したブータンの政策の重要性をよく表している。先に紹介したロンポ・ジクメ・ティンレ氏は、幸福の追求は全人類に共通した目標であり、それが政府の政策目標となるのは当たり前であると述べているが（Thinley, 1998; 2005）、「幸福」あるいは「Happiness」という言葉につきまとうややもすると主観的とも受け取られかねない響きのせいか、これまで幸福の増大を国家の政策目標に堂々と掲げている国はブータン以外には知られていない。しかし、最近になって、この考え方に共感している人も現れ始めている。いくつかの例をあげれば、イギリスの野党、保守党党首デビッド・キャメロン氏は演説の中で「お金よりも大切なものが人生にあることを認め、GDPだけでなく、国民の幸福－General Well-being－に焦点をあてた政策を行うときがきた」と述べている[10]。また、東京都荒川区では西川太一郎区長の下、「荒川区民総幸福指数（Gross Arakawa Happiness）」の向上を目指した区政が始まっている[11]。

この「一見主観的な」、したがって「非科学的」で非常にプライベートな響きをもつようにも受け取られる「幸福」という言葉を、政策の理念として掲げたことには大きな意義がある。その一つは、人々のまさに主観を政策に反映することができるということである。今まで、開発政策といえば、1人当たりの所得や初等教育の就学率といった客観的な指数に基づいて策定され、評価されることが多かった。しかし、幸福という概念を取り入れることによって、人々がそれらの客観的事実にどう感じているかということまでも、政策とその評価の範疇に含めることができるようになったのである。例えば、1年に1,000ドルの収入があるとする。今までの開発指標のなかでは、これは、1人当たりの所得1,000ドルと記録されるだけである。しかし、GNHのなかでは、人がこの1,000ドルという収入にどう感じているのか－多いのか、少なすぎるのか、多くはないがそこそこの生活はできるのか－を、その範疇に含めることができる。同様のことは、経済面だけでなく、保健、教育、自然環境等々、すべての分野にいえる。GNHの数値化というのは、まさにこのような客観的データと主観的データの融合の作業である。開発が「人々にとってのよりよい生活」という観点から評価されるべきという考えにたてば、このような試みの有用性は十分に理解できるであろう。国連開発計画が、1990年から毎年発表している人間開発指数も、開発の指数を経済以外の領域に広げたという点で評価できるが、人間開発指数に用いられているデータも客観的な数値が主である。このように見てみると、GNHの理念がいかに包括的で、画期的なものであるかが理解できる

であろう。

ここまでは、政府の政策レベルでの、また、政策に資することが前提とされているデータのレベルでの幸福の定義について述べてきた。では、ブータンの一般の人々は日常の生活のなかで、どのような事柄を大切に思って生活しているのであろうか。以下では、筆者が1997年から1998年の1年間、そして2004年から2007年の3年間、ブータンに住んで、ブータン人と交流をした中で感じたことを交えて、議論を続ける。

5 ブータンの村の風景

ブータン人と接してよく感じるのは、彼らが「自分の心の状態」をよく観ているということである。彼らは、自分が今、怒っているのか、喜んでいるのか、悲しんでいるのかということをよく感じ取っている。そして、彼らは、喜んだり、楽しくしているというよりも心が平安な状態にあることが重要であるという。これは、彼らの多くが信じる仏教の教えの影響であろう。また、ブータン人は「関係性」をとても重視する。それは、人と人との関係であり、人と自然環境との関係でもある。彼らは、関係性の中からこそ、幸せが生まれると考える。人を不幸にして、自分だけが幸福になるということは、彼らにとっての世の中の法則のなかでは起こり得ない。そして、人が成長するということは、精神的に成長することであり、自分たちは究極にはそこを目指さなければいけないという。どのようなことに遭っても、心を平安に保ち、人や自然と上手に付き合っていくことができる人間がめざすべきところなのであると思っている。人として精神的に成長するということと、お金をもっているということはあまり関係がないことのようにブータン人は思っている。確かに、日本には「衣食たりて礼節を知る」という言い方があり、経済的にある程度充足すると礼儀をわきまえるようになるという思考回路があるように思えるが、それでは、何をもって「充足」とするのか、そこに客観的な基準はない。

これに関連して、筆者が体験した出来事について少し紹介しよう。ブータンに滞在していた2007年初め、友人がブータン暦のお正月を祝いに彼の出身の村に一緒に行こうと誘ってくれた。ブータンには固有の暦があり、日本人が今では慣れ親しんでしまった太陽暦の1月1日は、お役所も商店も営業している全く普通の日であるのに、ブータン暦の新年にはどこも3日間ほどお休みとなり、人々は新しい服を着て、ごちそうを食べ、新年を祝う。誘ってくれた友人の出身の村へは、ティンプから車で5時間ほど行き、そこから歩いて山を2つ越えていくのだという。友人の家族総勢10人ほどで、2台の車に分乗して出発した。次の日、朝から歩き始めて、目指す村に着いた時にはすでに夕暮れ時であった。私の足で7時間ほどかかったことになる。村には、電気も水道もガスもない。一番近い小学校は子供の足で歩いて5時間かかるところにある。家から通える距離ではないため、子どもたちは学期のはじめに布団をかついで学校へ行き、学期中は親元から離れて、寄宿舎で生活する。また、簡易保健所は学校よりももっと遠い所にあるという。その簡易保健所への道も、雨季には途中にある川が増水して渡ることができなくなるという。筆者はそれまでに研究のために、ブータンのいろいろな村を訪問してきたが、この村はその中でも、もっとも不便な生活をしている部類に入るという印象であった。食べ物も、ブータン人は一般にコメを主食とするが、コメのとれないこの村では、ヒエやアワ、ソバが日常の主食である。

村の人々は久しぶりに会う親戚と遠来の珍客を暖かく迎えてくれた。筆者は、友人の母のお姉さんが一人で暮らす家に泊めていただくことになった。その女性は、年齢のためか言葉が多少不自由であったが、それでもたまに冗談も交えながら楽しい会話をする人であった。村に来て、2日目の夜のことである。その村でも一番貧しいといわれる家の人が、毛布を手に筆者の泊めてもらっている家を訪ねてきた。筆者にその毛布を使ってほしいというのである。聞くと、その日の早朝訪ねてきた時に、筆者が部屋の隅で、持参した寝袋の上に更に友人の民族衣装である「ゴ」をかけて寝ているのを見て、筆者が寒

いと感じているのだろうと思ったのだという。そして、自分の家にある一番上等の毛布を一日かけて洗って、乾かしてもってきてくれたという。確かに標高約1000メートルとブータンにしては低地のこの村でも、2月の明け方には冷え込みがあり、少し寒く感じていたのは事実である。しかし、親切に毛布を持ってきてくれた人の家は、家の壁も隙間から外が見えてしまうような有様である。初めて会う珍客に、毛布をわざわざ洗って、届けるなどということ自体、筆者には信じられないことであった。

筆者が泊めていただいた家の女性も、物質的にみてしまえば、けっして裕福な生活をしているわけではなかった。彼女の家には、大きな木製の箱が、かまどの両側の壁に沿っておいてあり、中には彼女の一年分のヒエ、アワ、ソバが入っていた。これと少しの服が彼女の全財産といっても過言ではない。牝牛を買い、畑を耕し、彼女はひとりで暮らしている。それでも、毎日、村の誰かが訪ねてくるし、その時のための自家製の酒も用意してある。村に2ヵ所ある水汲み場まで行かねばならないのは老齢のため大変であるが、村の人が気付いて水を運んでくれることもある。以前に訪問した別の村では、こんなこともあった。ブータンでは、早朝、水の満たされた容器を見ると、その日にやろうとしていることがうまく運ぶが、空の容器も見るとその日は何事もうまくいかない予兆であると信じられている。このため、朝、水汲みに行く人は、向こうから人が歩いてくるのを見つけると、すばやく空の容器をやぶの中などに投げ込んで見えないようにしてしまう。逆に水汲みの帰りには、水のいっぱい入った容器をまるで見せびらかすようにして持って歩くのである。このような習慣は、家々に水道管が整備されると、なくなってしまうのだろうか。

いろいろなことを考えて、思いが至ったのは人々の「心の余裕」である。毛布を持ってきてくれた人には、筆者が寒い思いをしているのではないかと思いやる心の余裕がある。筆者を泊めてくれた女性は、自分は飲まないけれど、来客用にと限られた穀物を使って地酒を造っている。村の人々は、老齢の女性が水を運ぶのは重いだろうと水汲みを手伝う。水汲みに行く人は、空の容器がまるで不運の素であるかのように、隠してしまう。彼らの心の中にはいつも自分以外の人向けのスペースがある。そして、これらの例を見る限り、その心の中のスペースの広さは、収入のレベルとはあまり関係がなさそうである。

村までの道

6 何のための経済成長か：経済成長の目的

本稿の最初に紹介した所得と幸福感についての議論に戻ろう。幸福の源の一つを村の生活の観察に基づいた筆者の仮説通り「心の余裕」であるとするならば、日本の経済成長は人々の心の余裕を大きくしただろうか。この問いに肯定的に答える日本人はそう多くないであろう。人々が日々の食糧の入手にさえ困難を感じていたといわれる第二次大戦直後の時期と比べるのなら話は別であるが。

お金持ちになれば幸せになるという前提は、今枝氏（2005, pp. 211-212）が指摘するように、戦争直後の荒廃の時代の産物であろう。その時代は、日々の食糧のことを心配しなければならないような状況であったと聞く。その後の日本でも、経済成長それ自体が目的であった。日本の上をいく経済大国が存在し、それらの国に追いつき、追い越すことが目標であった。去年より1台でも多くの自動車を、半導体を、その他もろもろの商品とサービスを製造し、販売することに国民が懸命になり、経済成長を達成してきた。少し極端に描写すると、生産活動に携わることが、人々に大きな生きがいをもたらし、自分の役割を会社の名前や役職と強く関連づけてきたのである。

筆者がブータンで観察したことをここでもうひとつ紹介しようと思う。ブータンでは、人々がそれぞれの役割を十分に果たしているように思われた。重要なところは、その役割が生産活動に関するところにとどまらないという点である。人は、どこでもいくつもの役割を持っている。ある人は、お役所の中間管理職であり、夫であり、父である。ある人は、看護師であり、妻である。筆者の知人などは、NGOの職員であり、喫茶店の共同経営者であり、娘であり、妹であり、友人であった。そのいくつもある役割をバランス感覚をもって果たしている。それが、筆者のもつブータン人像である。ブータンで仕事をしている時には、午後3時や4時ごろに子供を学校に迎えに行くために30分ほど仕事場を抜ける人は普通であった。子どもが熱を出したという人に、事務所に出てきて仕事をすることを期待する人はほとんどいなかった。あるいは、職場の同僚が、今日は両親がいないからと、年の離れた妹を学校へ迎えに行き、その女の子は仕事が終わるまで事務所の隅でおとなしくお絵かきをしていることもあったが、うるさくするわけでもなく、お行儀よく終業時間まで過ごしていた。もちろん、各自仕事に支障がないように工夫をこらしてはいるのだが、仕方のない状況というのはあるものである。それぞれの人は、自分にはいくつもの役割があるということを認識し、その役割をバランス感覚をもって、調整しながら果たしている。ブータン人は、生産活動にまつわる役割は、いろいろある役割の中でも最も「臨時の」ものであると感じているのではないだろうか。それは、ありていに言ってしまえば、定年で退職するとともに終わるのである。それに対して、父としての、母としての、兄としての、妹としての、妻としての、夫としての、友人としての役割は一生のものである。そして、このことが、生産活動が人生の大きな部分を占める傾向の強い日本人との大きな違いであろう。自分の役割を認識することは、それだけにとどまらず、自分の周囲の人が自分との関係以外にもっている役割にも思いをし、理解することにもつながる。

7 ブータンに学ぶ

本稿で筆者は、ブータンには幸福があり、ほかの国にはないとか、ブータンの開発政策にはなんの問題もないなどと主張するつもりは毛頭ない。ブータン政府も、国民の幸福の増大を目指して努力しているのであり、ブータンは何の欠点もない幸福な国であるというつもりは全くないと言っている。確かに、近年ブータンでは、教育を受けた若者が、学校を卒業したけれども、希望する職業に就けないでいることが社会問題となっている。また、イノシシなどの野生動物が畑に侵入して収穫前の作物を根こそぎ食べてしまうということが頻発し、農家の頭を悩ませている。一般に幸福の重要要素のひとつとみられる家族についても、ブータンでは離婚や再婚が比較的頻

ブータンのおばあさん

繁で、若者たちの間で非行にはしる人にはそのような複雑な家庭事情のなかで育った人が多いと指摘する向きもある。近代化が進み、人々が以前よりも利己的になっているとか、将来よい職業につくために学校での成績をあげることが重要視され、そのために子供たちは過剰なストレスを受けているという指摘もある。

ブータンにはブータンなりの問題があるという点も踏まえた上で、では、私たちは何を学べるだろうか。第1に、国の舵を取る人のリーダーシップの質の高さであろう。GNHという理念は第四代国王の発案であるが、歴史をひも解けば、すでにジクメ・ドルジェ・ワンチュック第三代国王（1928－1972、在位1952－1972）が「開発の目的は人々を豊かにし、幸福にすることにある。」と述べているように（Priesner,1996: p. 16）、ブータンの指導者にとっては、国民の幸福のための政策というのは長い歴史をもっている。第2に、幸福と経済成長の位置づけが明確になされている点があげられる。ブータンでは、経済成長は人々の幸福を増大させる手段の一つである。したがって、経済成長が国民の幸福にマイナスに働くようなことがあれば、それ以上の経済成長は是正されるか、あるいは、違った質の経済の発展が求められることになる。そして、第三に個が個として認められ、尊重される社会であるという点である。すでに紹介したように、それぞれの人が、社会の中で居場所をもち、自分の役割を果たしている。そして、自分の周囲の人を思いやる心の余裕をもっている。ブータンで過ごしていると、日本では考えられないほどのんびりしているところもあるが、それは、人々がそれぞれのいくつもある役割を果たし、人や自然との関係性を大事にしながら過ごしていることの結果とも理解できる。

誤解のないように付け加えておくが、筆者は、ブータン人の物質的な生活レベルが今のままでいいとは、決して思ってはいない。一番近い簡易保健所まで歩いて何時間もかかるところに住んでいる人。それゆえに治療が手遅れになり、先進国では命をおとさなくてもよいような原因で亡くなっている人がいる。そのような状況を肯定的に見る人は少ないであろう。もちろん、筆者を泊めてくれた家にも将来は水道も電気も整備されたら、おばあさんの生活はもっと便利にあるであろう。それを彼女が望むなら、そのようなインフラは整備されるべきである。自然環境や、村の伝統と文化に配慮したかたちで。

8 結論とあとがき

議論を本稿冒頭の、所得と幸福感の関係に戻したい。

ブータンでは、幸福感に関するデータは2005年の国勢調査の際のものが最初であり、今後GNHの数値化の作業とともに、時系列のデータの収集が行われる見通しとなっている。したがって、ブータンにおける所得と幸福感の関係についての考察が可能になるまでには、少し時間が必要である。本稿で示したブータンの例からは、所得と幸福感のあいだには関係はそれほどないというようにも理解できるが、これらの例は、筆者の個人的な観察に基づくものであることに、ここで読者の注意を喚起したい。ブータンの人々の幸福感が、彼らの収入のレベルの変化に伴って、どのように変化するか（またはしないか）は、これからの調査の結果を待たなければならないであろう。

経済成長一辺倒になっている社会を自転車に、そしてブータンを三輪車にたとえてみることができるだろう。自転車は早く進むよりゆっくり進むほうが難しく、こいでいないと左右どちらかに倒れてしまう乗り物である。だから、いつも人々は忙しくこいでいる。スピードも三輪車より出るから、早く目的地につけるが、その分、目的地につくまでの風景をじっくりみることはできない。一方、三輪車は、こがなくても倒れることもなく、じっくり道端に咲いている花や飛んでいる虫を見ながら走ることができる。道を間違ったかなと思って立ち止まって、地図を確認していても、倒れてしまうことはない。経済成長は、「成長」であるがゆえに、去年より今年はより多く生産することが求められる。去年と同じだけの生産量では成長していないことになる。三輪車のブータンは、自国の進んでいる方向が間違っていないか、よくよく確かめながらじっくり進むことができる。経済成長のゴールなどというものが存在しない中で、「先進国」の人々が、ただただ走り続けることに意義を見いだせなくなっても不思議ではない。

第四代国王の王妃アジ・ドルジェ・ワンモ・ワンチュックは、2004年に仏教大学で行った講演のなかで、人々を際限のない消費に駆り立てる近年の傾向に、仏教徒としてその倫理性を問わずにいられないと述べている（ワンチュック、2007: pp. 242-245）。終りのない物欲を満たそうとする行為に、違和感を覚える一般のブータン人の声を、筆者もよく耳にした。彼らは、一様に、物欲には際限がないことを指摘する。したがって、物欲を追求することによって決して満足感（幸福感）は得られないのだという。それは、経済成長に終りがないことと同じである。終りがない経済成長をどこまで追い求めていくのか。経済成長それ自身を目的にした経済成長に意義をみいだせるのか。経済成長の役割と位置づけをもう一度考えてみる必要があるように思えてならない。

いささか印象論的になってしまったかもしれないが、GNHという理念の下、国民の幸福を一番の目標として掲げるブータン政府の政策と、ブータンの一般の人々の生活を理解する一助となればと思い、このような表現の方法となった。GNHについて書く人はその概念と同じくらい主観的で非科学的だという批判も聞こえてきそうな気がする。本稿が、上で述べたようなGNHの理念が貢献するところ、そして、GNHが投げかけている新しい価値観についての理解の一助となれば幸いである。

【注】

1 38,394平方キロメートル（National Statistics Bureau, 2006）。

2 2006年の純就学率。

3 1960年から70年代頃のブータンの学校教育についてはUra（1998）を参照。

4 教育の「ブータン化」については上田（2006）160－173頁参照。

5 ただし、他の発展途上国と同様にGDPのデータには所謂インフォーマルセクターは含まれていないので、この数字には少し注意が必要である。筆者の経験では、特に農村部では物々交換が家計の重要な部分を占めており、また、貨幣との交換が行われていても織物や竹細工といった手工芸品の取引はインフォーマルに行われることが大半であり、GDPのデータには含まれていないことが多い。

6 第四代国王ジクメ・センゲ・ワンチュックは2006年12月に国王としての権限すべてを息子のジクメ・ケサル・ナムギェル・ワンチュックに譲り、譲位した。第五代国王の戴冠式は2008年に行われる予定となっている。

[7] 例えば、2004年度には保健医療分野と教育分野を合わせた政府の歳出は全体の27%にのぼり、過去の五カ年計画においても、一貫してこれらの社会分野に20%以上の予算が割り当てられている（UN Bhutan, 2006: p. 10）。

[8] ブータン研究所ウェッブサイト参照（http://www.bhutanstudies.org.bt/main/index.php）。

[9] 2005年の第二回のカナダでの会議はGenuin Progress Index Atlantic他 7 つの組織 との共催で行われ、参加者は33カ国から450人にのぼった。第 3 回はSathirakoses Nagapradipa Foundation他との共催であった。

[10] "Make people happier, says Cameron", BBC News Online, 22 May 2006, http://news.bbc.co.uk/2/hi/uk_news/politics/5003314.stmや、キャメロン氏のスピーチ参照。例えば、http://www.conservatives.com/tile.do?def=news.story.page&obj_id=129957

[11] 東京都荒川区のウェッブサイト参照。http://www.city.arakawa.tokyo.jp/a007/d00400036.html; http://www.city.arakawa.tokyo.jp/a001/b008/d00200245.htmlなど。

【参考資料】

＜英語＞

・Easterlin, R. A. (2001) "Income and Happiness: Towards a Unified Theory" *The Economic Journal*, Vol. 111, pp. 465-484

・Frey, B. S. and Stutzer, A. (2002) "What Can Economists Learn from Happiness Research?" *Journal of Economic Literature*, Vol. 40, No. 2, pp. 402-435

・Kenny, C. (1999) "Does Growth Cause Happiness, or Does Happiness Cause Growth?" *KYKLOS*, Vol. 52, pp. 3-26

・Layard, R. (2003) *Happiness: Has Social Science a Clue?* Lionel Robbins Memorial Lectures 2002/3 Delivered on 3, 4, 5 March 2003 at the London School of Economics

・Ministry of Education, Royal Government of Bhutan (2006) *General Statistics 2006* (Thimphu: Royal Government of Bhutan)

・Ministry of Planning (1996) *Eighth Five Year Plan (1997-2002) Vol. 1 Main Document* (Thimphu: Royal Government of Bhutan)

・National Statistics Bureau (2005) *Statistical Yearbook of Bhutan 2004* (Thimphu: Royal Government of Bhutan)

・National Statistics Bureau (2006) *Statistical Yearbook 2006* (Thimphu: Royal Government of Bhutan)

・Office of the Census Commissioner (2006) *Results of Population and Housing Census 2005* (Thimphu: Royal Government of Bhutan)

・Planning Commission, Royal Government of Bhutan (2006) *Guidelines for Preparation of the Tenth Plan (2007-2012)* (Thimphu: Royal Government of Bhutan)

・Priesner, S (1996) *"Gross National Happiness" —The Dimensions of Bhutan's Unique Approach to Development*, MA Dissertation (unpublished), Johns Hopkins University, Maryland

・Royal Government of Bhutan (2007) *Draft Constitution* 3rd draft as on 1st August 2007

・Schyns, P. (1998) "Crossnational Differences in Happiness: Economic and Cultural Factors Explored" *Social Indicators Research*, Vol. 43, pp. 3-26

・Thinley, J. Y. (1998) "Values and Development: 'Gross National Happiness'" in Centre for Bhutan Studies (ed.) (1999) *Gross National Happiness: A Set of Discussion Papers* (Thimphu: Centre for Bhutan Studies)

・Thinley, J. Y. (2005) *The Philosophy of GNH* A statement delivered by Lyonpo Jigmi Y. Thinley at the UNDP Asian Regional Conference in Bangkok, 30th April, 2005 (http://www.undp.org.bt/Governance/GNH/the%20philosophy%20of%20GNH.pdf)

・United Nations Bhutan (2006) *Common Country Assessment for Bhutan 2006* (Thimphu: United Natinos)

・Ura, K. (1998) "Ura Village, Yesterday and Today" in S. Armington *Bhutan* (Hawthorn, Australia : Lonely Planet)

・Veenhoven, R. (1991) "Is Happiness Relative?" *Social Indicators Research*, Vol. 24, pp. 1-34

＜日本語＞

・今枝由郎『ブータン仏教からみた日本の仏教』NHK出版、2005年

・上田晶子『ブータンにみる開発の概念：若者たちにとっての近代化と伝統文化』明石書店、2006年

・ワンチュック、ドルジェ・ワンモ『幸福大国ブータン：王妃が語る桃源郷の素顔』今枝由郎訳、NHK出版、2007年